

《原著》

COVID-19対策下における 給食の時間を楽しむ児童とエゴ・レジリエンス —愛知県 A 小学校の事例—

安達内美子^{1, 2}、出水香帆²、野々村遥可²、前川瑛菜²、松本薫乃²、上原正子^{1, 3}

要旨

【目的】2020年からの COVID-19の世界的大流行に伴い、学校給食では食事中の会話を控えるなど、給食の時間の子どもの過ごし方に大きな変化がみられた。そこで、給食の時間の変化に対して、自分なりに給食の時間を楽しむことができている児童と、日常的に柔軟に自我を調整し、状況にうまく対処し適応できるエゴ・レジリエンスとの関連を明らかにする。

【方法】2022年3月、愛知県 A 小学校全5年生49名に対して、集合法にて自記式質問紙調査を実施した。質問項目は、調査日の給食の楽しさ、一部修正した小学生用エゴ・レジリエンス尺度の質問（12項目）とした。調査日の給食の楽しさにより2群（楽しい群、その他群）に分け、エゴ・レジリエンスを比較した。

【結果】調査日の楽しさについての回答が得られなかった1名を除いた48名で解析を行った。調査日の給食が楽しかった者は26名（51.0%）、まあ楽しかった、少し楽しかった、楽しくなかった者は、それぞれ17名（33.3%）、2名（3.9%）、3名（5.9%）だった。エゴ・レジリエンスの合計（12～48）の中央値（25%タイル値-75%タイル値）は、楽しい群37.5（28.8-41.0）、その他群31.0（29.0-36.5）で、有意差は認められなかった。12項目の内、“私は、友だちから、いい人だと思われています”について、楽しい群ではあてはまる・少しあてはまるの回答の割合が84.6%、その他群では50.0%で、有意な関連が認められた（ $p=0.014$ ）。因子分析を行った結果、「好奇心」「感情調整」「客観的視点」の3因子解に分けられた。「好奇心」の合計点は、楽しい群の方がその他群と比較して有意に高く、Cronbachの α 係数でも信頼できる数値が得られた。

【結論】平時より食への好奇心が高まる支援の必要性和、COVID-19対策下では、対策の意義を児童が理解し、給食の時間を安心して友達と共有できる環境づくりの重要性が考えられた。

索引用語：COVID-19、給食時間の楽しさ、児童、エゴ・レジリエンス

I. 緒言

学校給食法¹⁾において、学校給食の目標の1つに「学校生活を豊かにし、明るい社交性及び協同の精神を養うこと。」が掲げられている。さらに、食に関する指導の手引きでは、学校での

食育を推進するにあたり、「食事の重要性、食事の喜び、楽しさを理解する。」視点の必要性を挙げている²⁾。つまり、学校給食は食事の楽しさを理解する食育の場であり、楽しい時間を通じて、明るい社交性及び協同の精神を養いながら学校生活を豊かにする機会とするべきであ

1 名古屋学芸大学健康・栄養研究所
2 名古屋学芸大学管理栄養学部
3 愛知みずほ短期大学

る。著者らの研究では、家庭での食事の楽しさには食事時の会話に関連している³⁾ことが示され、給食の時間においても友達や教員との会話で楽しさと関連していることが考えられる。

しかし、2020年から新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）の世界的大流行により、文部科学省は2020年7月から学校給食等の食事をとる場面において、飛沫を飛ばさないような席の配置や、距離がとれなければ会話を控えるなどの対応⁴⁾を2022年12月まで求めた。愛知県はその1か月前の11月からから食事時の会話も大声でない場合は許容することを示した。その理由としては、感染防止対策を行いながらの学校生活が長期化する中、児童生徒の成長や発達への影響が危惧されること等⁵⁾を挙げている。新型コロナウイルス感染対策（以下、COVID-19対策）下において、児童生徒等の中には、自分や家族も感染するのではないかと不安や恐れを抱くなど、心理的なストレスを抱えている者もいると危惧されている⁵⁾。さらに給食の時間を楽しく過ごすための会話まで控えなければならなかった給食の時間の過ごし方の変化は、児童生徒等の「食べる力」⁶⁾の形成に何かしらの影響を与えていたことが考えられる。

「食べる力」を構成する概念の1つに非認知能力を挙げることができる⁶⁾。COVID-19対策下のようなストレスフルな状況での「食べる力」の形成に関連と考えられる非認知能力として、レジリエンスがある。レジリエンスとは、ストレスフルな状況にもかかわらず、うまく適応できる過程、能力及び結果⁷⁾である。しかし、ストレスには日常的に繰り返される比較的軽微なストレスから、重大なストレス（逆境・外傷・悲劇・脅威・深刻な健康上の問題・職場や財政的なストレス等）が存在する。そして、レジリエンスの中に必ずしも重大なストレスに晒された状況を前提としない⁸⁾エゴ・レジリエンスといわれるものがある。COVID-19終息がみえないなか、COVID-19対策下におけるストレスは日常的なストレスになっていると考えられる。そこで、COVID-19対策下の給食の時間の変化に対して、自分なりに給食の時間を楽しむことができてきている小学5年生と、日常的に柔軟に自我を

調整し、状況にうまく対処し適応できるエゴ・レジリエンス⁸⁾との関連を明らかにする。

児童を調査対象とした理由として、思春期でもある中学生は獲得したレジリエンスを発揮できることが重要であるのに対し、児童、すなわち小学生の時期はレジリエンスを獲得する段階にある⁹⁾といわれている。そのため、本研究で得られる知見はCOVID-19対策が実施されている中で、どのようなレジリエンスをどのように高めればよいかといった支援法を考える上で意義があると考えた。また、小学5年生とした理由はCOVID-19流行以前の給食を経験していることから、給食の時間を通じてのエゴ・レジリエンスの高め方を考えることができると考えた。

II. 方法

1. 調査協力者

COVID-19対策が嚴重に実施されていた2022年3月、愛知県A小学校に協力を依頼し、5年生49名に集合法（担任教諭による指導の下、授業時間内に実施）による横断的自記式質問紙調査を行った。

愛知県A小学校が所在する地域は、愛知県東南部に位置し、第一次産業、第二次産業ともに盛んな地域である。

2. 調査内容

調査日の給食の楽しさについて、「楽しかった」「まあ楽しかった」「少し楽しかった」「楽しくなかった」と回答を求めた。

小学生用エゴ・レジリエンス尺度の質問（12項目、4件法）⁸⁾を用いるにあたり、事前に調査協力者とは別の児童から意見を求め、著者らで検討した結果、6番目の質問“私は、友だちから、とてもパワフルだと思われています”を“私は、友だちから、とても元気があると思われています”に修正して用いた。

3. 解析

調査日の給食の楽しさについての回答が得られなかった1名を除いた48名で解析を行った。

調査日の給食の楽しさについて、楽しかったと回答した者を“楽しい群”とし、まあ楽しかつ

た、少し楽しかった、楽しくなかったと回答した者を“その他群”とし2群間の比較を行った。

エゴ・レジリエンスはエゴ・レジリエンス尺度12項目について、回答肢のあてはまるは4点、少しあてはまるは3点、あまりあてはまらないは2点、まったくあてはまらないは1点として、合計点を求め Mann-WhitneyU 検定にて比較した。

12項目ごとについては、あてはまる、少しあてはまると回答した者を“あてはまる”、あまりあてはまらない、まったくあてはまらなると回答した者を“あてはまらない”として、Fisher の直接法にて比較した。

さらにエゴ・レジリエンス尺度について、主因子法、バリマックス回転による因子分析を行い、各因子の項目合計点を算出し Mann-WhitneyU 検定にて比較した。

統計処理には IBM SPSS Statistics Ver28 for Windows を使用し、有意水準は危険率5% (両側検定) とした。なお、欠損値は項目ごとに除外した。

4. 倫理的配慮

名古屋学芸大学研究倫理委員会の承認を得て実施した (承認番号570)。研究成果は、学校での食育の推進に役立てていただけるよう還元する (報告書を作成し、説明に伺う) ことを約束し、学校長の承諾を得て無記名自記式で実施した。調査時に児童には、本調査が学校の成績に関係がないこと、個人を特定するものではないことを明示し、口頭での説明並びに説明文書を配布し、調査に解答することにより同意を得たこととした。

Ⅲ. 結果

調査日の給食が楽しかった者は26名 (51.0%)、まあ楽しかった、少し楽しかった、楽しくなかった者は、それぞれ17名 (33.3%)、2名 (3.9%)、3名 (5.9%) だった。

表1に示す通り、エゴ・レジリエンス尺度の合計 (12~48) の中央値 (25%タイル値-75%タイル値) は、全体で35.0 (29.3-39.0) だった。楽しい群は37.5 (28.8-41.0)、その他群は31.0 (29.0-36.5) で、有意差は認められなかった。

エゴ・レジリエンス尺度12項目ごとに比較したところ、表2に示す通り、「私は、友だちから、いい人だと思われています」について、楽しい群では“あてはまる”の回答の割合が84.6%、その他群では50.0%で有意な頻度の差が認められた ($p=0.014$)。

エゴ・レジリエンス尺度について主因子法、バリマックス回転によって、共通因子が及ぼす影響力を示す因子負荷量を求め、高い順に並べて因子分析を行った。因子負荷量が大きく減少する段階で区切り因子数を定めたところ3因子となった。「私は、友だちから、とても元気があると思われています」のみ因子負荷量が0.388となり低値であったが、項目数及び対象人数の少なさから許容範囲であると判断し、12項目すべてを採用した。第一因子には、「日々の生活で『楽しいこと』『面白いこと』を見つけるのがとくい」「はじめてやることや、慣れていないことも、楽しんでやる」「何かするとき、アイデアがたくさん思いつく」といった6項目が高い因子負荷量を示した。そのため、第一因子は物事に興味や探求心を表す「好奇心」因子と解釈した。

表1 エゴ・レジリエンス尺度12項目合計点 (12~48点) の中央値 (25% -75%)

	全体 n=48	楽しい群 n=26	その他群 n=22	p値#
中央値 (25%-75%)	35.0 (29.3-39.0)	37.5 (28.8-41.0)	31.0 (29.0-36.5)	0.082

上段;中央値 下段;25%-75%タイル値
#;Mann-WhitneyU検定
Cronbachの α 係数=0.821

表2 給食の楽しさとエゴ・レジリエンス（エゴ・レジリエンス尺度）の関連

エゴ・レジリエンス尺度		全体 n=48	楽しい群 n=26	その他群 n=22	p値*
私は、友だちにやさしく、思いやりがあります	あてはまる	40(87.0)	22(91.7)	18(81.8)	0.405
	あてはまらない	6(13.0)	2(8.3)	4(18.2)	
私は、落ち込むことがあっても、すぐに立ち直ります	あてはまる	31(66.0)	17(68.0)	14(63.6)	0.768
	あてはまらない	16(34.0)	8(32.0)	8(36.4)	
私は、はじめてやることや、慣れていないことも、楽しんでやります	あてはまる	37(77.1)	22(84.6)	15(68.2)	0.302
	あてはまらない	11(22.9)	4(15.4)	7(31.8)	
私は、友だちから、いい人だと思われています	あてはまる	33(68.8)	22(84.6)	11(50.0)	0.014
	あてはまらない	15(31.3)	4(15.4)	11(50.0)	
私は、今まで食べたことがない物を、食べてみるのが好きです	あてはまる	26(55.3)	17(68.0)	9(40.9)	0.082
	あてはまらない	21(44.7)	8(32.0)	13(59.1)	
私は、友だちから、とても元気があると思われています	あてはまる	39(81.3)	21(80.8)	18(81.8)	1.000
	あてはまらない	9(18.8)	5(19.2)	4(18.2)	
私は、友だちよりも、いろいろなものごとを知りたい気持ちが強いです	あてはまる	25(53.2)	15(60.0)	10(45.5)	0.387
	あてはまらない	22(46.8)	10(40.0)	12(54.5)	
私は、何かするときに、アイデアがたくさん思いつきます	あてはまる	29(60.4)	19(73.1)	10(45.5)	0.077
	あてはまらない	19(39.6)	7(26.9)	12(54.5)	
私は、新しいことや、やったことがないことに挑戦することが好きです	あてはまる	32(66.7)	19(73.1)	13(59.1)	0.366
	あてはまらない	16(33.3)	7(26.9)	9(40.9)	
私は、日々の生活で「楽しいこと」「面白いこと」を見つけてるのがとくいです	あてはまる	30(62.5)	18(69.2)	12(54.5)	0.375
	あてはまらない	18(37.5)	8(30.8)	10(45.5)	
私は、いやなことやつらいことがあっても、またがんばれます	あてはまる	36(75.0)	20(76.9)	16(72.7)	0.751
	あてはまらない	12(25.0)	6(23.1)	6(27.3)	
私は、だれかに腹を立てることがあっても、すぐにきげんが直ります	あてはまる	34(72.3)	18(69.2)	16(76.2)	0.746
	あてはまらない	13(27.7)	8(30.8)	5(23.8)	

人数(%)
 欠損値は項目ごとに除外した
 # ; Fisherの直接法(両側検定)

第二因子には、「落ち込むことがあっても、すぐに立ち直る」「だれかに腹を立てることがあっても、すぐにきげんが直る」「いやなことつらいことがあっても、またがんばれる」といった3項目が高い因子負荷量を示した。そのため、第二因子は感情をコントロールすることができることを表す「感情調整」因子と解釈した。第三因子には、「友だちから、いい人だと思われている」「友だちにやさしく、思いやりがある」「友だちから、とても元気があると思われている」といった3項目が高い因子負荷量を示した。そのため、第三因子は自分のことを客観的に理解していることを表す「客観的視点」因子と解釈した(表3)。

各因子の項目合計点を算出したところ、「好奇心」では楽しい群18.0点、その他群15.0点、「感情調整」では楽しい群9.0点、その他群9.0点、「客観的視点」では楽しい群10.0点、その他群8.5点であった。「好奇心」と「客観的視点」の項目合計点は、楽しい群はその他群と比較して有意に高かった(表4)。また、同じ因子内の項目の内容が類似している程度を示す内的一貫性を検

討するためにCronbachの α 係数を算出した結果、好奇心は $\alpha = 0.828$ 、感情調整は $\alpha = 0.691$ 、客観的視点は $\alpha = 0.512$ となり、好奇心で信頼できる高い値が得られた(表3)。

IV. 考察

COVID-19対策下の給食の時間の変化に対して、自分なりに給食の時間を楽しむことができている小学5年生とエゴ・レジリエンスとの関連を明らかにすることを目的に自記式質問紙調査を行った。調査日の給食の楽しさにより楽しい群とその他群に分け、エゴ・レジリエンスを比較した。

1. 給食の楽しさ

調査日の給食の楽しさについて、COVID-19の流行以前に比べて給食の時間における制限が多いにも関わらず、84.3%が楽しかった、またはまあ楽しかったと回答していた。2021年5月に行った愛知県内の調査では、給食の時間がとても楽しい、または楽しいと回答した割合が70.6%(6校・236名)というデータや、

表 3 エゴ・レジリエンス尺度の因子分析結果

項目	I	II	III	共通性
好奇心 (α=.828)				
10 私は、日々の生活で「楽しいこと」「面白いこと」を見つけるのがとくいです。	.908	.120	-.028	.45470
3 私は、はじめてやることや、慣れていないことも、楽しんでやります。	.651	.551	.092	.57793
8 私は、何かするとき、アイデアがたくさん思いつきます。	.645	-.032	.275	.73528
9 私は、新しいことや、やったことがないことに挑戦することが好きです。	.642	.396	.233	.44693
5 私は、今まで食べたことがない物を、食べてみるのが好きです。	.568	.302	-.064	.41793
7 私は、友だちよりも、いろいろなものごとを知りたい気持ちが強いです。	.468	.089	.221	.32731
感情調整 (α=.691)				
2 私は、落ち込むことがあっても、すぐに立ち直ります。	.271	.697	-.135	.27569
12 私は、だれかに腹を立てることがあっても、すぐにきげんが直ります。	.043	.670	.092	.49218
11 私は、いやなことやつらいことがあっても、またがんばれます。	.080	.531	.027	.62374
客観的視点 (α=.512)				
4 私は、友だちから、いい人だと思われています。	-.014	.081	.663	.83914
1 私は、友だちにやさしく、思いやりがあります。	.311	-.140	.582	.28886
6 私は、友だちから、とても元気があると思われています。	.173	.384	.388	.45856
因子寄与	2.825	1.965	1.149	5.938
因子寄与率 (%)	23.5	16.4	9.6	49.5

表 4 各因子の項目合計点の中央値 (25% -75%)

	全体 n=48	楽しい群 n=26	その他群 n=22	p値#
好奇心	16.0 (14.0-20.0)	18.0 (15.0-21.8)	15.0 (13.0-18.3)	0.041
感情調整	9.0 (8.0-10.0)	9.0 (6.5-10.5)	9.0 (8.0-9.5)	0.712
客観的視点	9.0 (8.0-10.0)	10.0 (8.3-10.0)	8.5 (7.8-9.0)	0.020

上段;中央値 下段;25%-75%タイル値
#;Mann-WhitneyU検定

COVID-19流行以前は90~100%に近い値だったとの報告もある¹⁰⁾。回答選択肢の区分が異なるため、単純な比較はできないが、本調査の結果は COVID-19流行期の愛知県の調査よりも高く、流行前よりも低い。その理由として考えられることは、愛知県内では栄養教諭が給食の時間に給食放送やクイズなどを工夫し、楽しく食べる雰囲気づくりを積極的に行っていたという報告¹⁰⁾がある。A 小学校には共同調理場との兼務ではあるが栄養教諭が在籍しており、学校全体が教育理念・教育計画の中に学校給食を明確に位置づけ、栄養教諭ら関係者がその役割を十分に果たしていたと考えられ¹¹⁾、給食の時間の

楽しさの維持につながっていたと考えられる。

2. 給食の楽しさとエゴ・レジリエンス尺度

エゴ・レジリエンス尺度12項目の合計点は楽しい群は37.5、その他群は31.0と、楽しい群はその他群と比較して有意差はなかったものの高かった。今回用いた尺度は「私は、今まで食べたことがない物を、食べてみるのが好きです」以外、食べることや給食に直接的に関連する質問がなかったため、有意な差がみられなかったと考えられる。

エゴ・レジリエンス尺度12項目ごとに比較したところ、「私は、友だちから、いい人だと思われています」について、楽しい群では“あては

まる”の回答の割合がその他群より高く、有意差な関連が認められた。この関連が認められた「私は、友だちから、いい人だと思われています」は、自分に対する肯定的な意識を意味する自己肯定感とも関連がある¹²⁾といわれている。自己肯定感が高い子どもは精神的に安定し、何ごとにも意欲的で前向きに生きようとする傾向にある¹²⁾。そのため、友達との会話がなくとも孤独感を抱くことなく、給食の時間を友だちと安心して共有していると感じることができ、これが給食の楽しさに繋がっていると考える。実際にA小学校ではないが愛知県の栄養教諭からは、子どもたちが「給食、楽しんでるよ。おしかったら隣の子に“ニコッ”とするようにしているよ」という場面があったとの報告があり¹⁰⁾、児童はレジリエンスを発揮し、自分たちなりに工夫をしていたと考えられる。

このように児童にはレジリエンスを発揮する可能性があるため、教育者は児童がレジリエンスを獲得するための支援をすべきである。特にCOVID-19対策下のような状況において、友達や周囲の人たちから、いい人だと思われるためには、COVID-19対策に自分が貢献している、友達や周囲の人たちの役に立っていると思える自己有用感こそが重要なのではないかと考える。自己有用感の獲得は、前述の自己肯定感の獲得につながるといわれ、自己有用感に裏付けられた自己肯定感が大切とされている¹³⁾。COVID-19対策下において、自己有用感を獲得し高めるためには、児童が対策の意義を理解し、自分なりのこだわりで努力したり工夫したりしたことを認める¹³⁾ が必要である。

3. 給食の楽しさと好奇心

因子分析を行った結果、「好奇心」「感情調整」「客観的視点」の3因子解に分けられた。「好奇心」の合計点は、楽しい群の方がその他群と比較して有意に高く、Cronbachの α 係数でも信頼性が高いと考えられた。

「客観的視点」の合計点は、楽しい群の方がその他群と比較して有意に高く有意差が認められたが、Cronbachの α 係数で信頼できる数値が得られなかった。その理由として、「私は、友だちから、いい人だと思われています」以外の

「私は、友だちにやさしく、思いやりがあります」「私は、友だちから、とても元気があると思われています」は、「私は、友だちから、いい人だと思われています」と同様に自己肯定感ではあるが、自己有用感とは異なることが考えられる。

食事の楽しさと「好奇心」について、3歳児では楽しそうにいきいきと食べる子は、意欲や好奇心があり自発性に富むが、逆に食べるときに楽しくなさそうに嫌々食べる子、食欲のない子は意欲や好奇心等が乏しい傾向がみられていること、5歳児でも摂食行動と心の状態の関係において、食事時の表情と心の状態とに関連がみられる¹⁴⁾と報告されている。対象者の年齢は異なるが、本調査においても、給食の楽しさと好奇心に関連があることが確認され、児童の好奇心が高まることが給食の楽しさに繋がると考える。具体的にはまず教育的アプローチとして、農業体験や調理実習、調理場見学等が効果的ではないかと考える。また環境的アプローチとして、ランチルームでの喫食、青空給食、セレクト給食、バイキング給食、リクエスト給食等が効果的ではないかと考える。そして、これらのような児童の好奇心を高めるための支援はCOVID-19対策とは関係なく平時より必要である。

4. 本研究の限界

本調査は栄養教諭が在籍し、給食の時間について環境が整った1校のみの結果であり、結果をそのまま一般化することはできない。また、エゴ・レジリエンス尺度についても、食べることもまたは給食に直接的に関連する質問ほとんどのため、給食の楽しさとレジリエンスの関連を考えると、今後食べることや給食の時間の過ごし方を質問文に取り入れた尺度の開発が必要である。

しかし、まだCOVID-19流行の波が続く中、いつまた新たな感染症が流行するかわからない状況において、子どもの成長や発達を妨げずどのような支援ができるのか考える一助となることを期待する。

V. 結論

COVID-19対策下において、自分なりに給食の時間を楽しむことができている児童と、日常的に柔軟に自我を調整し、状況にうまく対処し適応できるエゴ・レジリエンスとの関連を検討した。給食の時間を楽しむことができている児童は、そうでない児童に比べ、“私は、友だちから、いい人だと思われています”という自己有用感が高く、好奇心を抱いていた。平時より食への好奇心が高まる支援の必要性と、COVID-19対策下では、対策の意義を児童が理解し、給食の時間を安心して友達と共有できる環境づくりの重要性が考えられた。

【謝辞】

本研究を行うにあたり、調査にご協力いただいた愛知県 A 小学校 5 年生の皆さま並びに教職員の皆さまに、心より御礼申し上げます。

【利益相反】

本論文について申告すべき利益相反はありません。

文献

- 1) 文部科学省. 学校給食法, 昭和29年第160号, 最終改正平成27年624日第46号 (1954)
- 2) 文部科学省. 食に関する指導の手引き—第二次改訂版—. 東京: 健学社, 2019: 1-25
- 3) 安達内美子. 小学校5年生時と中学校2年生時における家庭での“食事の楽しさ”と関連要因—愛知県 N 中学校区での反復調査—. 名古屋学芸大学健康・栄養研究所年報2017; (9): 1-13.
- 4) 文部科学省. 学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～ (2022年4月 Ver. 8). https://www.mext.go.jp/content/20220404_mxt_kouhou01-000004520_01.pdf (2023/10/11)
- 5) 愛知県教委員会. 「教育活動の実施等に関するガイドライン」の改訂について (通知). <https://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/437097.pdf> (2023/10/11)
- 6) 犬飼凌輔, 安達内美子. 「食べる力」における非認知能力. 名古屋栄養科学雑誌2022; (8): 59-66.
- 7) 榊智子, 吉田美里, 石田敦子 他. 小学生のレジリエンスと生活習慣との関連. 東海学校保健研究 2016; (40): 15-23.
- 8) 藤原寿幸, 河村昭博, 河村茂雄 他. 小学生用Ego-Resiliency 尺度 (ER89-K) の作成と信頼性・妥当性の検討. 学級経営心理学研究 2021; (10): 1-8.
- 9) 小林朋子, 大森純子, 石田秀. 子どものレジリエンスを育てるための「心・技・体」による包括モデルの実践. 静岡大学教育学部研究報告 人文・社会・自然科学篇 2017; 67: 89-103.
- 10) 上原正子. 学校給食から“みんなで楽しく食べる”はどう変わったか. 食生態学—実践研究 2022; (15): 10-11.
- 11) 足立己幸, 衛藤久美. 共食と孤食 50年尾食生態学研究から未来へ. 東京: 女子栄養大学出版社, 2023: 243-288
- 12) 横山正幸. 子どもの自尊感情と体験の関係について. 日本生活体験学習学会 2010: 53-62.
- 13) 文部科学省国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター. 生徒指導リーフ「自尊感情」? それとも、「自己有用感」? Leaf. 18. <https://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf18.pdf> (2023/10/12)
- 14) 二木武. 小児の栄養発達行動. 東京: 医歯薬出版, 1998

Abstract

Ego-resilience of elementary school students who enjoyed and did not enjoy a school lunchtime during COVID-19 countermeasures: Case study of an elementary school in Aichi Prefecture, Japan

Namiko Adachi^{1,2}, Kaho Izumi², Haruka Nonomura², Ena Maekawa²,
Yukino Matsumoto², Masako Uehara^{1,3}

Objective: The purpose of this study was to clarify the ego-resilience of elementary school students who enjoyed and did not enjoy the school lunchtime during the period of COVID-19 countermeasures.

Methods: In March 2022, a self-administered questionnaire survey was conducted with all 49 fifth graders at an elementary school in Aichi Prefecture. Items included a question about whether the students enjoyed the school lunchtime on the day of the survey as well as 12 items from a partially modified ego-resiliency scale for elementary school students, which ranged from 12 (low) to 48 (high). The students were divided into two groups based on whether or not they enjoyed the school lunchtime on the day of the survey, and the ego-resilience of the two groups was compared.

Results: After excluding one student who did not respond whether or not they enjoyed the school lunchtime on the day of the survey, 48 students were included in the analysis. Of these 48 students, 26 (51.0%) answered that they enjoyed the school lunchtime on the day of the survey; 17 (33.3%) and 2 (3.9%) answered that they enjoyed it fairly well and a little, respectively, while 3 (5.9%) answered that they did not enjoy it at all. The median value (interquartile range) of the total ego-resilience was 37.5 (28.8–41.0) for the group that enjoyed the school lunchtime and 31.0 (29.0–36.5) for the group that did not, and there was no significant difference between the two groups. Regarding the ego-resilience items, 84.6% of the students who enjoyed the school lunchtime and 50.0% of those who did not answered “yes” or “somewhat” to the item “My friends think of me as a good person,” and there was significant difference between the two groups ($p=0.014$). Factor analysis yielded three factor solutions: “curiosity,” “emotional regulation,” and “objective perspective.” The total score for “curiosity” was significantly higher in the group that enjoyed the school lunchtime compared with the group that did not, and Cronbach’s alpha coefficient showed satisfactory reliability.

Conclusion: Even in normal times, support is needed to increase students’ curiosity about food and nutrition. During COVID-19 countermeasures, we believe that it is important for children to understand the significance of the countermeasures and to create an environment where they can feel safe sharing their school lunchtime with their friends.

Key word: COVID-19 countermeasures, enjoy a school lunchtime, elementary school student, ego-resilience

1 Institute of Health and Nutrition, Nagoya University of Arts and Sciences

2 School of Nutritional Sciences, Nagoya University of Arts and Sciences

3 Aichi Mizuho Junior College